

# 戦後の隅田川におけるまちづくり活動の展開 —都市を代表する河川に対する認識の変遷に関する研究—

Historical development of Machidukuri at post-war Sumidagawa  
—The Study on change of recognition of city-representative-river—

86162 竹本千里

Recently, the importance of city-representative-river is growing up. It is because the river could be the identity of the city, the structure of the city, the place where people rest and take part in Machidukuri, and reconsider the history of the city.

In this research, I put three purposes below. Firstly, I clarify the historical development of Machidukuri at post-war Sumidagawa, which is one of the city-representative-rivers, considering the spacial change and the plan about Sumidagawa. Secondly, I study the change of recognition of Sumidagawa through the historical development of Machidukuri. Thirdly, I get suggestion for the city-representative-river in the future, from the case study of Sumidagawa.

Through this research, I found that Machidukuri of post-war Sumidagawa could be classified into 5 periods. I also clarified that Sumidagawa has been recognized not only as the city-representative-river, but also as the familiar water's edge, and it was due to the river spacial change. Therefore, in changing the river spacial structure, it is important to prepare places which give rise to Machidukuri activity.

## 0. 研究の背景と目的

### 0-1. 研究の背景

人間は河川に寄り添って都市を形作ってきた。例えばテムズ川、セーヌ川、隅田川といった大都市の主要な河川は、都市と関与し合い、影響を与え合いながら、共に歴史を積み上げてきた。そして近年では、都市のアイデンティティ、都市の骨格、都市住民が集まり憩う親水空間、まちづくり活動を行うための公共空間の場、都市の歴史を見つめ直すための場など多様な機能が期待されるようになってきている。大都市の主要な河川は、都市を代表する河川として甦りつつあると言える。

### 0-2. 研究の目的

そこで本研究では、江戸・東京の母なる川として古来から存在してきた隅田川を対象に、①戦後におけるまちづくり活動の変遷を、沿川の空間変容・計画策定やその背後にある社会情勢との関わりをふまえながら、明らかにすること、②それをふまえた上で、戦後の隅田川に対する認識の変遷を明らかにすること、そしてこれらを通して、③都市を代表する河川の今後のあり方に対する知見を得ることを目的とする。

### 0-3. 研究の視点

物事に対する認識とは、その物事に対して具体的な行動を起こすことで大きく育まれると考える。逆に言えば具体的な行動を知ること、その行動の源や行動の結果として育まれる認識について、考察できると考える。

そこで本研究では、まちづくり活動を「隅田川に対する認識を形作る行為」と広く捉え、積極的な関与行動(狭義のまちづくり活動)だけでなく利用実態なども分析に含めることとする。そしてその分析を通して、行動の源や行動の結果育まれた認識についても考察する。また、まちづくり活動や認識が生じる場としての隅田川にも着目し、物理的な空間構造とまちづくり活動・認識の関係性についても考察する。

### 0-4. 先行研究

隅田川に関する先行研究としては、沿川の空間的变化を取り扱ったもの<sup>1</sup>、沿川の景観を取り扱ったもの<sup>2</sup>、人のアクティビティを取り扱ったもの<sup>3</sup>、認識を取り扱ったもの<sup>4</sup>などがある。また河川流域のまちづくりに関する先行研究としては、まちづくり活動の連携に着目したもの<sup>5</sup>、まちづくり活動の経緯や継続要因に着目したもの<sup>6</sup>などがある。しかし、都市を代表する河川に対して、まちづくり活動や認識に関する総合的な分析を行ったものはまだ存在しない。

### 0-5. 本研究の構成・手法

第1章では、調査対象場所である隅田川の概要を示す。第2章では、戦前の隅田川における空間変容とそれに伴うまちづくり活動・認識の変遷について文献調査をもとに明らかにする。第3章では戦後の隅田川に関する計画と空間変容についてまとめる。第4章では、ヒアリング調査・文献調査から明らかになった戦後の隅田川におけるまちづくり活動を、活動主体・範囲・内容に関する総合的な分析を通して概要を把握する。第5章では、活動主体・範囲・内容ごとにその変遷を追い、そこから戦後の隅田川に対する認識について考察する。第6章では、以上をふまえた上で結論を述べる。

### 0-6. 用語の定義

まず隅田川とは「岩淵水門で荒川から分離し、王子・千住・浅草・両国など通って東京湾へと注ぐ河川のうち、岩淵水門から勝鬃橋・相生橋付近までの部分」とする。その中で、岩淵水門から綾瀬川合流部までを上流部、綾瀬川合流部よりも河口の部分を下流部とする。そして河川に沿う、もしくは面する公園や道路、歩道(親水テラスも含む)などを沿川部と呼ぶこととする。

## 1. 隅田川の概要

### 1-1. 隅田川の呼び名

隅田川の下流部では、隅田川以外にも、千住川・古隅田川・浅草川・宮戸川・大川など多数の別称が与えられてきた。

### 1-2. 利根川・荒川水系の流路の変遷

隅田川の上流部では、利根川の東遷事業(1594-1654)、荒川の瀬替え工事(1629-1723)、荒川放水路の開削(1913-1930)などの工事が古くから行われ、隅田川の源流や名称、流入する河川も時代によって変化してきた。

## 2. 戦前の隅田川の空間変容とそれに伴う認識の変遷

### 2-1. 戦前の隅田川の空間変容

【江戸時代初期:河口部の市街化の開始】中世には浅草あたりまでしか陸地でなかった隅田川沿川であるが、江戸時代に入ると家康によって河口の埋立てが進められた。右岸側では、日本橋周辺から浅草・橋場辺りまで市街化していた。更に上流では、街道沿い以外は豊かな田園風景が広がっていた。また左岸側では、小名木川が開削され、江東デルタ地帯の開発拠点としてまず深川元町・深川獺師町がつくられた。小名木川以北は農地が広がっており、所々に集落が点在する程度であった。

【江戸時代中後期:二大繁華街を中心とした行楽地化】1657年に明暦の大火が発生してからは、隅田川東部の開発が本格的に進められた。大名屋敷、組屋敷、社寺仏閣などが集まり、沿川部には、右岸と同様、河岸・物揚場・御蔵が分布した。両国橋付近は、橋の架橋により、茶屋・見世物・寄席などが集積し、浅草周辺は墨堤や吉原、待乳山など多くの歓楽地が集まり、行楽の名所として親しまれた。上流の赤羽、尾久、王子、千住などは田園風景が広がり、沿川は木母寺や百花園など、四季折々の自然の名所があった。

【明治時代:先駆的な工場の立地】政府の富国強兵政策により、隅田川下流部の日本橋・深川・吾妻橋・鐘淵などで先駆的な工場が多数立地するようになった。浅草や両国等の行楽地はまだ存在していたが、その一方で沿川の

工場地区化、河川の汚染等が進行した。上流部では江戸時代と変わらずに田園風景が残されていたが、千住や王子といった一部のエリアでは工場が進出し始めていた。

【大正・昭和戦前時代:震災復興事業と工場地区化】右岸の柳橋以南は、商業・業務へ特化し、左岸側は工業地域化が進んだ。特に小名木川沿いは重工業や軽工業の工場などが建ち並ぶようになった。向島や橋場付近は、荒川放水路の完成で水害の恐れが低減したために、田園や用水路が埋立てられ、鉄鋼などの工場や労働者住宅へと変化した。上流部でも、全域に工場群が見られる。このように工場が立地する一方で、1923年に発生した関東大震災の復興事業では、6橋梁や沿川での区画整理事業、臨川公園の整備が行われ、近代的な景観が生み出された。

### 2-2. 戦前の隅田川におけるまちづくり活動及び認識

【江戸時代初期:舟運の普及と上流階級の娯楽利用】家康によって関東地方の広域的な水路が整備されたことで、物流や交通の道として隅田川が利用されるようになった。また日常的な交通手段として、隅田川の兩岸を結ぶ渡しが広く利用された。娯楽面では、屋形船で四季折々の行事を楽しむなど、一部の上流階級による遊びの舞台として機能していた。

【江戸時代中後期:舟運の発展と沿川の行楽地化】8代吉宗によって墨堤に桜が植樹される等、町人も楽しめる風物詩が沿川で行われる様になり、江戸近郊の名所として行楽地化が進んだ。豪華な屋形船も武士の衰退とともに

時代背景	空間的変化	交通	まちづくり活動及び認識	狭義のまちづくり活動
江戸以前	浅草寺を中心とした浅草津の発展 →東京湾へと湾が移動していく	古くから渡し船の発達		
江戸時代初期	1600 徳川家康が入城 →土着づくり →交通水路の建設 →街道の整備	1594 千住大橋の架橋	隅田川の一部は禁漁区 慶長の頃から屋形船が発展 →明暦・万治期が屋形船の最盛期 1656 過度な船遊びの取締り	
江戸時代中後期	1657 江戸の町の建設が一段落 1657 明暦の大火 →本所・深川の開発 →隅田川四太夫橋の建設 →意地蔵・武家屋敷などの郊外移転	1659 利根川の東遷事業 1645 佃島の埋め立て	舟運の普及と上流階級による娯楽の舞台 →広域的な河川利用などにより、江戸と周辺を結ぶ新しい航路が生まれる →屋形船に乗って四季折々の行事を楽しむなど、上流階級による船遊び・遊覧が盛んに行われる	
明治時代	1868 明治維新 →鉄道網の発達 →工業社会化の推進	1872 遠式汽船の出現 →汽船の発達が始まる	舟運の普及と上流階級による娯楽の舞台 →広域的な河川利用などにより、江戸と周辺を結ぶ新しい航路が生まれる →屋形船に乗って四季折々の行事を楽しむなど、上流階級による船遊び・遊覧が盛んに行われる	
大正時代	1914-18 第一次世界大戦 1923 関東大震災の発生 1923-30 震災復興事業	1913-1930 荒川放水路の建設工事 →水害の軽減 →農業の発展	舟運の普及と上流階級による娯楽の舞台 →広域的な河川利用などにより、江戸と周辺を結ぶ新しい航路が生まれる →屋形船に乗って四季折々の行事を楽しむなど、上流階級による船遊び・遊覧が盛んに行われる	
昭和戦前	1931 満州事変 1937 日中戦争 1941-45 第二次世界大戦	1931 江東地区の工場化・機械工場・化学工場 →同時に、工場地帯・労働者住宅の集積 →北區・王子あたり →隅田川一帯に久あたり →足立区・鉄鋼工場の林立	舟運の普及と上流階級による娯楽の舞台 →広域的な河川利用などにより、江戸と周辺を結ぶ新しい航路が生まれる →屋形船に乗って四季折々の行事を楽しむなど、上流階級による船遊び・遊覧が盛んに行われる	

図1 戦前の隅田川における空間変容とまちづくり活動・認識の変遷

簡素化し、屋根船や猪牙船として広く使われるようになり、隅田川は町人文化の舞台として花開いた。江戸時代初期から引き続き舟運は成熟期を迎え、浅草以南では沿川に河岸・物揚場・御蔵が多く分布した。

【明治時代:一般庶民の日常交通、遊びの場への移行】鉄道などの陸上交通が、当初は舟運に接して立地する等舟運の影響を受けながら、次第に普及していき、明治末期には舟運に取って代わるようになる。その中で、一銭蒸気など一般庶民の日常交通としての利用が割合を占めるようになる。また工場の立地や鉄道の普及によるレジャーの多様化等により、行楽地としての価値も低減した。しかし一方で、レガッタや水泳等新しい娯楽も誕生し、日常的な遊びの場として利用されるようになった。このように近代化の波によって少しずつ沿川が変化していく中で、明治41年にはパンの会が結成される。石井柏亭や木下杢太郎などが隅田川沿川で異国情調・江戸情調を感じながら芸術などについて白熱した議論を行った。

【大正・昭和戦前時代:舟運の衰退と名勝保存運動】明治末期頃から衰退し始めていた舟運がさらに力を失い、沿川の名所の価値もどんどん失われていった。近代化に伴い、沿川に工場が次々と立地し、価値ある史蹟名勝が取り壊されていった。この状況に対して危機感を募らせた知識人たちは、1917年に櫻の會、1918年に武蔵野會、1922年に隅田川保勝會を結成し、名勝を保存しようと活動を展開していった。江戸時代の歴史性や名所の価値が再び見直された時期であったと言える。

### 3. 戦後の隅田川に関する計画と空間変容

#### 3-1. 戦災状況と戦災復興計画

3月10日および4月14日の大空襲によって、隅田川沿川のはほぼ全域が壊滅的な被害を受けた。終戦直後には東京復興計画がつくられていたが、事業着手に手間取っている間にバラックが建ち並び、また隅田川沿川は震災復興

事業が実施されたという理由から、結局復興事業は全く行われずに終わった。

#### 3-2. 工場の立地と地盤沈下・水質汚濁の深刻化

朝鮮戦争(1950年)に始まる高度経済成長期に突入すると、沿川には重化学工業の工場が立地するようになり、隅田川の水は汚染されていった。また工場が地下水を多くくみ上げたために江東地区の地盤沈下は深刻化した。

1958年の水質保全法・工場排水規制法、1967年の公害対策法、1971年の水質汚濁防止法の制定といった全国的な水質浄化の流れの中で、隅田川でも沿川区による浄化活動が行われる。沿川区は浚渫促進連合協議会(1956)や浄化対策本部(1963)を設け、都・国に対して浚渫や浄化対策を要請し、これにドロボロ浚渫事業(1958-)や下水道の整備(1961-)、荒川より浄化用水の導入(1964-)が行われた。また地盤沈下対策としては、1961年に工業用水法、1963年に工業用井戸転換、1972年に天然ガス採取の停止(鉱業権の買収)などが行われ、地盤沈下は沈静化した。

#### 3-3. 水害と防潮堤の建設

戦後、カスリーン台風(1947)、キティ台風(1949)、狩野川台風(1958)など大規模な台風が連続して関東地方を襲ったために、沿川では防潮堤の建設が進められた。第一次高潮対策事業(1949-1956)、第二次高潮対策事業(1957-)、東京高潮対策事業(1963-)という一連の事業により、防潮堤の高さはA.P.+6.4mまで上積みされた。

#### 3-4. 東京オリンピックと首都高速道路の建設

急増する自動車交通に対応するため、1960年代頃から交通施設の整備が進められた。既存の公共空間を最大限利用し、用地取得なしに高架道路を建設した結果、右岸の清洲橋から堅川合流部にかけて、左岸の堅川合流部から綾瀬川合流部にかけての沿川部に首都高速道路六号線、七号線が走るようになった(1971年全線開通)。



図2 防潮堤の建設年次



図3 親水テラスの建設年次

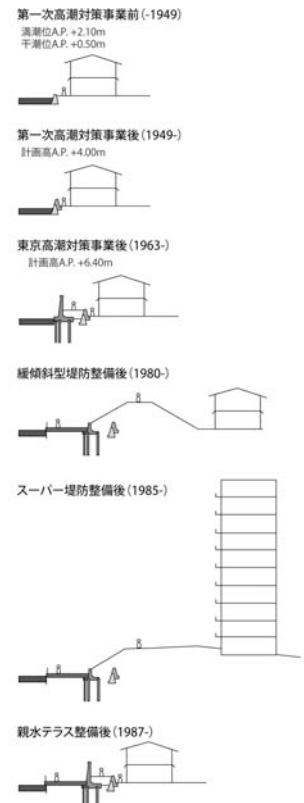


図4 堤防事業の変遷と断面図

### 3-5. 親水意識と緩傾斜型堤防の建設

高度経済成長が一息ついた1970年代には、水質や地盤沈下の改善によって、隅田川が見直されるようになった。直立型堤防から緩傾斜型堤防への改善に関する議論が行われ(1974年、緩傾斜型堤防構想)、1985年には隅田川で初めての緩傾斜型堤防が桜橋(隅田川初の歩行者専用橋)袂に完成した。

### 3-6. 民間開発とスーパー堤防の整備

バブル期の潤沢な資金を背景に、民間開発と並行して前述の緩傾斜型堤防やスーパー堤防が次々と建設されるようになった。2010年現在、隅田川沿川の24ヶ所で緩傾斜型堤防もしくはスーパー堤防の整備が完了している。

### 3-7. 親水テラスの整備

緩傾斜型堤防、スーパー堤防の整備と並行して、水辺の早期利用を図る目的で、1987年以降親水テラスの整備が進められた。桜橋周辺を皮切りに隅田公園、両国、深川・日本橋周辺へと広がり、1997年には下流部の概ねの部分において親水テラスが完成した。一方上流部では順次スーパー堤防と並行して整備が進められているものの、沿川部の大半は未だに防潮堤が占めている。

### 3-8. 江戸東京ブームと隅田川沿川での施設整備

1980年代後半から1990年代にかけて、江戸東京論がブームとなった。隅田川でも江戸からの歴史文化が大いに注目され、一時期はバブル景気も後押しし、深川・芭蕉記念館(1981/1991)、すみだ郷土文化資料館(1998)、江戸東京博物館(1993)、かちどき橋の資料館(2005)、親水テラスのギャラリー(2007)等多くの施設が整備された。

### 3-9. 都市計画への隅田川の組み込み

1990年代以降、河川法改正(1997)やNPO法制定(1998)等により河川まちづくりへの市民参加が促進されるように

なった。また2004年には墨田区への新タワーの建設が決定し、沿川区でのまちづくりで再び隅田川が重要な軸として位置づけられるようになった<sup>7)</sup>。

## 4. 戦後の隅田川におけるまちづくり活動の変遷

戦後の隅田川におけるまちづくり活動は、下流部では活動主体、範囲、内容の分析を通して総合的に5つの時期に分類できた。上流部では殆ど活動が行われていないことが明らかとなった。

### 4-1. 下流部

【萌芽期:水辺の観光利用と防潮堤の建設】まず1945-1965年を萌芽期としている。浅草・柳橋の住民を中心とした水辺の観光利用が行われていた。これらは沿川部および隅田川水上での小規模な活動が多い。しかし水質汚濁や防潮堤の建設などによって活動の中止が余儀なくされ、その中で浅草観光連盟による浄化活動が始まるようになった。

【拡大期:水質の浄化と花火復活の動き】1965-1978年を拡大期としている。萌芽期から開始された浄化活動が中央区内でも実施され本格的に展開された。1970年代に入り水質が改善すると、1962年に中止となった隅田川花火大会を復活させようという動きが浅草周辺で盛んとなる。この活動は沿川部に限ることなく、防潮堤によって断絶されてしまった水上でも行われ、水上での線的な動きが生じるようになった。

【転換期:隅田川の新しい利用方法の模索】1978-1985年を転換期としている。1978年に隅田川花火大会が復活したことにより、まちづくり活動が一段落を迎える。1978年以降は隅田川の新しい利用方法が模索された時期であった。また住民以外による活動や外部の視点からの活動が初めて生まれたのもこの時期であり、その意味でも

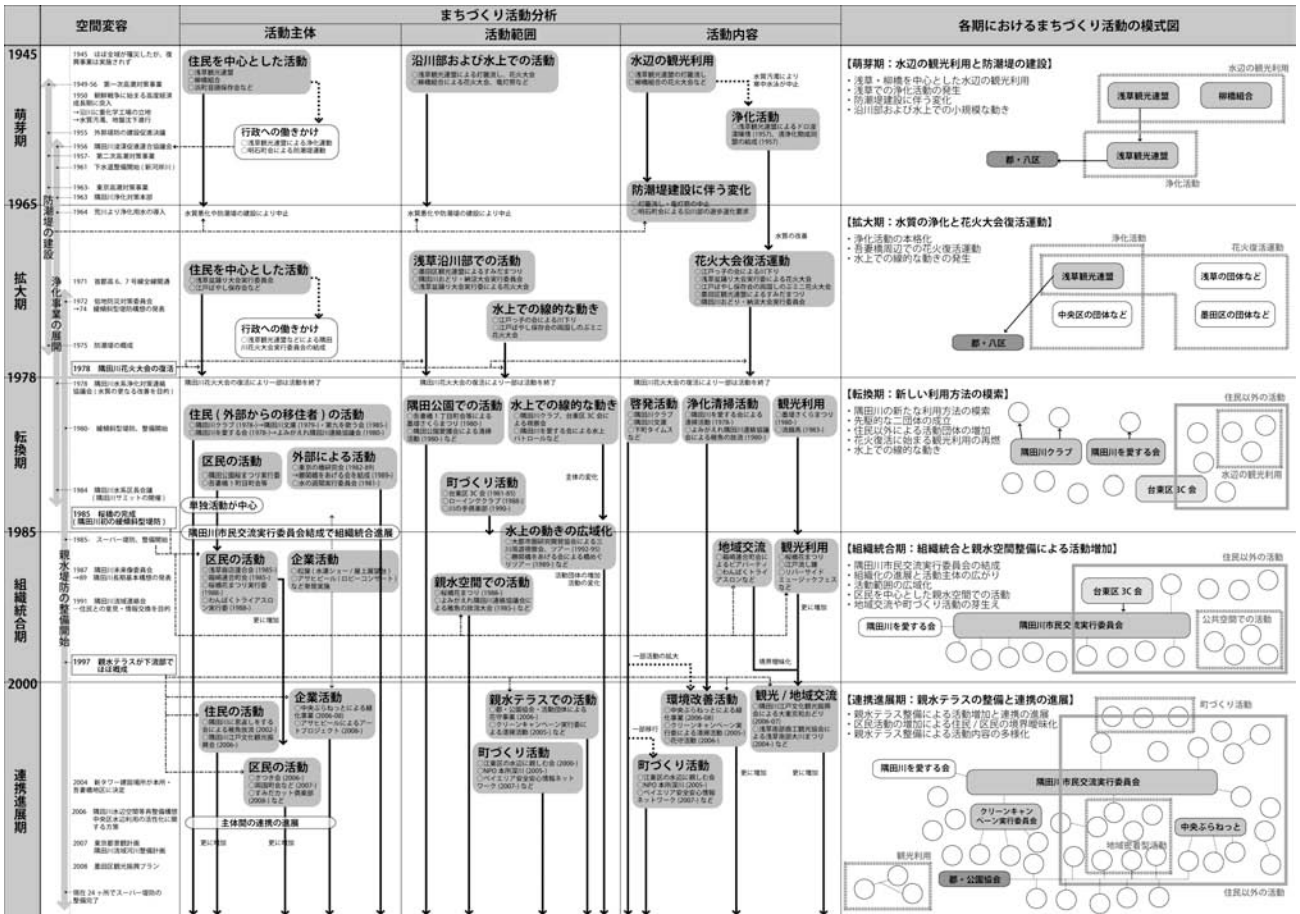


図5 戦後の隅田川における空間変容とまちづくり活動の変遷

転換期であったと言える。1978年には隅田川クラブと隅田川を愛する会という先駆的な二団体が成立し、次々と啓発活動や浄化清掃活動を展開していく。彼等は積極的に隅田川の水上を利用し、川下りや魚類生息調査を行った。また花火大会の新しい会場となった浅草隅田公園周辺では、再び水辺の観光利用が盛んとなっていった。

【組織統合期:組織統合と親水空間整備による活動増加】1985-2000年を組織統合期としている。転換期にはそれぞれの団体が独自で活動を行っていたが、1985年に隅田川市民交流実行委員会が結成されると、この連絡協議会をもとに組織化が進んでいく。隅田川の水上で活動は広域化し、上流河川や支川、東京湾等も併せて周遊する等の活動が増えた。また一方では1985年に竣工した桜橋を皮切りに次々と親水空間が整備され、そこを舞台とした住民・区民による活動も増加した。観光利用の他にも地域交流を目的とした活動が増えたのもこの時期である。

【連携進展期:親水テラスの整備と連携の進展】2000年以降を連携進展期としている。1997年に下流部のほぼ全域において親水テラスが整備されたことで住民・区民・企業による活動が急増する。その中で、隅田川市民交流実行委員会とは別の基盤となる組織が結成され、それを中心に連携が進んだ。活動内容としては親水テラスの環境改善活動や観光・地域交流の活動が多い。また少数ではあるが、町づくりの中で隅田川を水辺として捉えようと活動を行っている団体もある。

#### 4-2. 上流部

上流部におけるまちづくり活動は、下流部と比較して圧倒的に少なく、その内容も時代による変化があまり見られなかった。これは防潮堤が未だに沿川部の殆どを占めていること、隅田川よりも荒川の方に愛着を持っていること等が要因だと、ヒアリング調査からわかった。沿川部の自然環境の取り壊しに対する反対運動や、親水空間整備による新しい活動の発生等、全体として、自治体や民間による大規模な開発がまちづくり活動を誘発している傾向が見られた。

### 5. 戦後の隅田川に対する認識の変遷

5章では特に下流部に着目して、活動主体・範囲・内容の詳細な分析を行った。隅田川に対する認識は、身近な視点と東京を代表する河川としての広域的な視点が交互に発生し、共存しながら現在に至ることがわかった。

#### 5-1. 活動主体に関する分析

萌芽期から拡大期にかけては、住民による小規模な活動が中心であった。浅草や柳橋など戦前からの繁華街の住民が、水辺に情緒を取り戻して復興しようと活動した時期であった。この実現のためには水質汚濁や防潮堤などの問題にも対処する必要があったため、行政への働きかけ・要求が多くなっている。

1978年に花火大会が復活したことで住民の活動は一段落し、それ以外の主体(住民の中でも外部からの移住者や、区民、外部)による活動が増える。外部の視点から捉えた隅田川が意識され、隅田川に対する意識の低さや東京を代表する河川としての課題等が注目された。隅田川市民交流実行委員会という連絡協議会が結成されたことで、その活動規模は全国まで広がっていった。

組織統合期から連携進展期にかけては、多くの親水空間が整備されたことによって、区民による小規模な活動が急増した。連携進展期には、町づくり活動を中心としながらも隅田川を意識した活動を展開する区民等も増

え、住民と区民の境界が曖昧となっていく。また活動団体が急増したことによって主体間での連携も進展した。

#### 5-2. 活動範囲に関する分析

萌芽期には、沿川部と水上は連続しており、陸上・水上の区別なく、地域に密着した小規模な活動が多かった。しかし萌芽期末から拡大期にかけて防潮堤が建設されたことによって、以後の活動は沿川部と水上で完全に分断されてしまうこととなった。

その影響もあり、拡大期には水上での線的な動きが生じるようになった。この傾向は転換期でも引き継がれ、組織統合期には周辺の水系も航路に含めるなど広域化の傾向が見られる。更なる水質の浄化や隅田川に対する意識の向上のためには、広域的な視点で活動する必要があったということも、活動の拡大の一因と言える。

一方、沿川部での動きとしては、拡大期から浅草周辺での活動が中心となっている。しかし組織統合期に親水空間が次々と整備されたことで、点的な活動が全域に広く分布するようになる。更に連携進展期の親水テラスの整備によって、沿川部でも線的な移動が可能となり、ウォーキングイベント等の線的な活動も発生している。

沿川部の背後にある町を中心とした活動は、転換期に萌芽を見せ、連携進展期に再び活発となってきている。

#### 5-3. 活動内容に関する分析

萌芽期には、浅草や柳橋など戦前からの繁華街を中心に水辺の観光利用が中心であった。しかし水質汚濁や防潮堤の建設によって、活動が中止となり、そこから浄化活動が発生した。拡大期に水質が改善すると、再び戦前(特に江戸時代)からの情緒を復活させようと花火大会の復活運動が展開されていく。

花火が復活した転換期には、隅田川に対する意識の低さや東京を代表する河川としての課題が議論され、啓発活動が活発に行われた。例えば水質の更なる浄化を将来も進めていくために、稚魚の放流を通じた環境教育、啓発活動が行われた。またこの時期には、隅田川のあるべき姿が議論され、江戸からの歴史性やボートの聖地としてのあり方、橋の展覧会としてのあり方など様々な価値付けが行われた。

組織統合期にはこの傾向が受け継がれる一方で、新しく整備された親水空間を、地域交流や町づくり、観光振興の手段として利用する動きが生まれる。

連携進展期には親水テラスが整備されたが、ホームレスが集中する、殆ど利用する人がいない、という悪循環が生まれていた。このような親水空間の環境改善のため、また多くの人に利用される賑やかな河川とするために、花守事業や清掃活動、緑化事業などが多くの団体によって展開されている。

### 6. 結論

#### 6-1. 戦後の隅田川におけるまちづくり活動

戦後の隅田川下流部でのまちづくり活動は、活動主体・範囲・内容の分析から、萌芽期・拡大期・転換期・組織統合期・連携進展期の5つの時期に分けられた。上流部では、沿川部の開発など環境変化に対応してまちづくり活動が誘発されていることがわかった。これらのまちづくり活動は、各時期の社会情勢や隅田川沿川の空間的变化の影響を大きく受けていることも明らかとなった。

## 6-2. 戦後の隅田川に対する認識

戦後の隅田川に対する認識については、身近な視点と東京を代表する河川としての広域的な視点が、交互に積み重なり、現在まで共存していることがわかった。

この多様性は、隅田川に対する認識の大きな特徴であると言え、都市を代表する他河川や生活河川と異なる点だと考えられる。

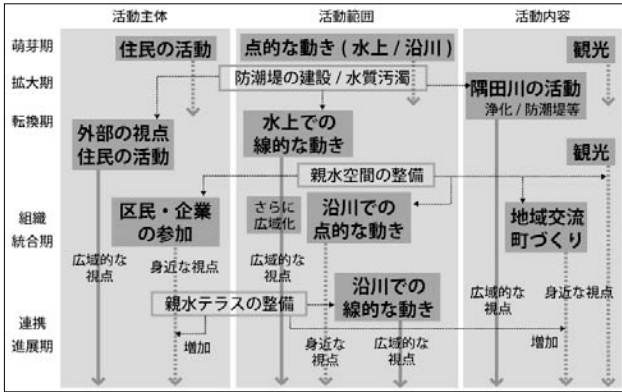


図6 戦後の隅田川に対する認識の変遷

## 6-3. 隅田川の今後のまちづくり活動に対する提言

今後のまちづくり活動の課題として、組織統合期に結成された隅田川市民交流実行委員会の活動維持が困難となっていくことが挙げられる。活動メンバーの高齢化や活動に対する不十分な支援などが要因で、活動維持が困難になりつつある。

この解決策として、まず連携進展期に結成された多数の団体との連携を促進する方法が考えられる。これらの団体は支援を受けている団体もいくつかある一方で、活動範囲が限定されているという課題も抱えている。連携を進めることで、課題を解消し合うことができると考えられる。第二に、現在は花守事業や緑化事業など単一的な活動のみに対して支援が行われているが、より多様な活動に対応できるよう柔軟な支援制度を構築することが望まれる。第三に、これらの支援に頼らずとも自立的に活動を展開できるように、例えば沿川企業との連携を進めていくなどのシステムを構築することも、一つの解決策として考えられる。

## 6-4. 今後の都市を代表する河川に対する知見

隅田川では連携進展期に親水テラスが整備されたことによって以下のような特徴が生まれた。

まず第一に、水上だけでなく沿川部でも線動的動きが生じたことである。明治以降の舟運の衰退により、都市骨格としての機能は失われていた隅田川であるが、近年になって再び都市の骨格として甦りつつあると言える。

第二に、身近な視点からの地域密着型の活動が急増したことである。防潮堤の建設によって、萌芽期の頃の地域密着型の活動はなくなってしまい、代わりに広域的な視点が活動が増えた。この活動と共存しながら、再び地域密着型の活動が行われるようになったことで、まちづくり活動や認識の多様性が生み出されたと言える。

一般的に河川におけるまちづくり活動としては、自治体による空間整備が中心と考えられる。しかしその空間整備に関しても、整備後に沿川区民等によるまちづくり活動が促進されるような事業を実施することで、河川の多様性が養われ、維持されていくと考えられる。

### 〈補注〉

- 大橋真奈美ほか(1996)「隅田川における河川敷の変遷に関する研究」日本建築学会関東支部研究報告集；島正之ほか(1996)「隅田川沿岸の変化に関する研究」千葉工業大学研究報告 理工編；島正之ほか(1998)「戦後における隅田川防潮堤の変化に関する研究」千葉工業大学研究報告 理工編；遠藤毅(2004)「東京臨海域における埋立地造成の歴史」地学雑誌113(6)pp.785-801；遠藤毅(2006)「東京低地における工場等の分布を主体とした土地利用状況の変遷」地学雑誌115(4)pp.500-507；遠藤毅(2007)「東京低地における工場分布の変遷と21世紀初頭の工場跡地の利用状況」地学雑誌116(5)pp.593-626；松本悟ら(1998)「隅田川沿岸の産業施設の変遷と立地形態にみる表裏転換」千葉大学大学院1996年度修士論文
- 鈴木章生(2007)「『江戸名所図会』にみる隅田川名所と流域の地域特性」国立歴史民俗博物館研究報告 第136号pp.135-157；谷口智雅(1998)「写真からみた隅田川の水辺景観の変化」地域研究Vol.38, No.2, pp.21-28；田尾若菜ほか(2006)「浮世絵に描かれた江戸・東京の水辺空間における構成要素間相互の配置の復元的考察」日本大学大学院修士論文；須藤訓平ほか(2007)「長谷川雪旦の挿絵からみた江戸の水辺空間構造に関する研究」ランドスケープ研究70(5), 2007, pp.373-376；奥山裕生(1992)「視点場と視対象からみた浮世絵隅田川景観の特徴」日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.471-472
- 岡田智秀ほか(1997)「江戸名所図会と明治東京名所図会における親水行為・空間」日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.281-282；原泰之(2007)「江戸・東京における水辺レジャーとしての船遊びの歴史の変遷とその位置付けに関する考察」東京大学農学部修士論文；杉浦美和子(1995)「江戸名所図会に描かれた水景の分析一わが国における伝統的親水行為に関する研究一」日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.319-320；荒井歩(2000)「江戸下町の水辺における庶民の遊行行動に関する研究」ランドスケープ研究63(5)pp.639-642
- 羽生冬佳ほか(2003)「江戸の伝統的名所の特性と明治以降戦前までの名所としての価値の変遷に関する研究」ランドスケープ研究66(5), 2003, pp.457-460；樋口忠彦ほか(1981)「江戸の四季の名所について」日本都市計画学会学術研究発表会, pp.379-384；樋口忠彦ほか(1982)「明治期東京の名所の変遷過程について」日本都市計画学会学術研究発表会論文集, pp.511-516
- 森山奈美(1995)「市民によるまちづくりのネットワークに関する研究一鶴見川流域ネットワークを中心に一」日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.669-670；松本浩ほか(1996)「野川流域に関わる市民団体の活動の変遷に関する研究」ランドスケープ研究59(5), 1996, pp.225-228；佐藤裕美子ほか(2003)「鶴見川流域の地域環境保全における市民団体活動及びネットワーク組織に関する研究」ランドスケープ研究66(5), 2003, pp.815-818；堰川岳ほか(2007)「NPOによる流域環境の保全と活用に関する研究一北上川河口域における地域活動の経緯と地域諸団体のネットワーク一」日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.533-534
- 大橋南海子ほか(2002)「河川の多様な利活用に関する市民参加・市民活動の研究一荒川下流域をケースとして一」日本建築学会技術報告集 第15号, pp.279-282；藤田勝ほか(2008)「地域づくりにおける市民団体の組織形態と活動状況について一河川愛護団体を例に一」土木計画学研究・講演集
- 都による隅田川長期基本構想(1989)、東京都景観計画(2007)、隅田川流域河川整備計画(2007)、墨田区による隅田川水辺空間等再整備構想(2006年策定)、墨田区観光振興プラン(2008年策定)、中央区による中央区水辺利用の活性化に関する方策(2006年)などがあげられる